

市民の意見

発行：市民の意見30の会・東京

小田実さん追悼特集
2007/10/1



住所：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 TEL/FAX:03-3423-0185 郵便振替：00120-9-359506
ホームページ：http://www1.jca.apc.org/iken30 eメール：iken30@mwb.biglobe.ne.jp



小田実さんの死を悼む
反戦の遺志をついで

小田実さん追悼特集・目次

詩『あなたはチング（親友です）』 高銀

葬儀と市民デモ

葬儀報告

弔辞

編集部

鶴見俊輔

吉川勇一

金大中

ハワード・ジン

ノーム・チョムスキー

岡本美加代

デモの準備ができるまで

追悼・私にとっての小田実さん

予感された遺書

母・娘の二人で

I・N

伊津信之介

内山孝子

内山 唱

大木晴子

KY生

静岡県・YK

次田哲治

村雲 司

西田まりあ

小田実さんが遺したもの

小田・文学・デモ

小田さんが遺した言葉

遺されてできること

「日米平和友好条約」と「市民軍縮」と

―小田さんの重要な提案と構想―

編集後記

表紙・10頁の写真 撮影 島川雅史

4・5頁の写真 撮影 大木茂

6・7・12・14頁の写真提供 吉川勇一

2

4

5

5

8

9

9

10

11

11

12

12

12

13

13

13

14

14

15

17

20

21

22

あなたはチング（親友）です

コウイン（高銀）

あなたはアジアの親友です

あのベトナムの「ホアンビン（平和）」の親友です

あの韓国の民主主義の親友です

あの韓国の北側のピョンヤン（平壤）やウォンサン（元山）の親友です

あの北太平洋サイパンの親友です

あなたは上海人民の親友です

あなたはオセアニア・アポリジニーの親友です

あなたはアメリカ原住民スー族の親友です

あなたは第3世界の親友です

アフリカの長い苦痛が何であるのか

あなたはあまりにも早く知りました

あなたは日本の被差別部落出身者の親友です

日本の関東、関西の若い市民、年老いた庶民の永遠の親友です

あなたは世界の至る所の親友です

貧しい人、学べなかった人、醜い人、見捨てられた人

決して 成功した人、名をとどろかした人たちだけの親友ではありません

いわゆる一流だけではなく

二流

三流も

あなたの暖かい親友でした

あなたは風吹く街の親友です

あなたは

春、夏、秋、冬なく

多くの国



イラスト：鷺谷眞理子

多くの都市の懐かしい親友でした
けれども

あなたは深夜

あなた自身の親友に帰るのです

書いて、書いて、また、書きました

読んで、読んで、また、読みました

一夜の没頭は、翌日、本になりました

若き日のあの古代プラトンも

ロンギノスも全部溶かして

あなたの大阪的な説話にしてしまい

長い夜を明かしました

あなたの耳は多くの国の言葉を聞き分けました

それゆえ

それゆえ

あなたの日本語は世界語です

今日（きょう）、世界の至る所で

あなたの親友が

あなたに別れを告げています

悲しみが真実であるはずなのに

悲しみて

あなたの名前を呼びます

泣き声が嘘でないはずなのに

泣き声が

あなたの名前です

これからあなたは私たちの大気となる一つの場です

これからあなたの名前は私たちすべての胸に深く刻まれるでしょう

ああ、小田実よ！

2007年8月4日（玄香実 記）



高銀（コ ウン）

韓国の詩人、作家。韓国の民主化運動に積極的にかかわった小田実が代表を務めた『中心21』主催の『日韓識見シンポジウム（1992年）』に招待され、交流を深めた。代表作『祖国の星』

小田実さん 葬儀報告

編集部

7月30日、小田実さんが亡くなった。胃癌、75歳。

小田実という人物を、何と表現すればよいのか。行動する知識人、元ベ平連代表、市民運動のカリスマ、今どきはやらないギリシヤ文学の翻訳者、やたらに長い小説や評論を書き飛ばし、日本ではあまり知られていないロータス賞を受賞した人。彼はすべてのすべてであり、そのすべてをはるかに越えた存在だった。

8月4日、都内青山葬儀場で葬儀が営まれた。白いカーネーションで埋められた祭壇の正面には、額に手をあててほほえむ小田さんの遺影。斎場の500席はすべて埋まり、会場外にも300人ほどが列をつくった。

冒頭、葬儀委員長の鶴見俊輔さんが、小田さんをジョン万次郎と比較しながら、別項のように簡潔な言葉で故人を悼んだ。加藤周一さんは、「小田さんは呼びかけの人で、呼びかけるだけでなくいつも先頭に立って行動した。有言実行の人だった」と述べ、ドナルド・キーンさんは『玉碎』を英訳したいきさつを語り、小田さんを「世界的作家」と称えた。また、1995年の

阪神・淡路大震災の際、小田さんと共に行動した「市民」議員立法実現推進本部事務局長の山村雅治さんは、「あの時、政府が被災者への義捐金だけで済まそうとしていたのに対し、小田さんは『いくらなんでもひどすぎる。これが人間の国か』と怒った。小田さんが亡くなった7月30日、政府は被災者の住宅本体への公的援助を検討し始めた。だから、小田実は生きている」と

話した。

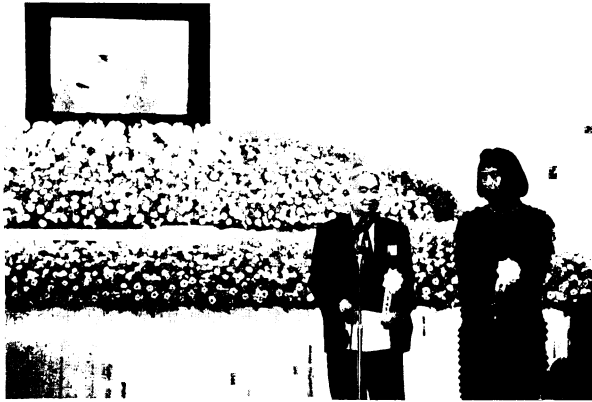
最後に、かつてベ平連事務局長として小田さんと名コンビを組んだ吉川勇一さんが、時おり声をつまらせながら、弔辞を読み上げた（別掲）。

続いて読み上げられた弔電は、国際色ゆたかだった。ハワード・ジン、ノーム・チョムスキー、コ・ウン（高銀）、キム・デジョン（金大中）、カン・ヘスク、ファン・ソギョン、グエン・バン・ミン。他にもギリシヤ、ドイツ、イタリア、ノルウェー、イギリスなど各国の知識人から、小田の死は世界の損失であるとの声が寄せられた。

この日の葬儀には、九州、関西、関東各地からおよそ800人の市民が集まった。ドイツからは、日独市民交流のE・アイヒホルンさんが姿を見せた。

参列者全員が献花した後、出棺を見送る時に、誰からともなく拍手がまきおこった。小田さんのみごとな一生を称える拍手だった。続いて、福富節男さんの指揮により、追悼デモに移った。鶴見俊輔さんを先頭に約500人が参加、「軍隊はいらない」「世界に平和を」とシュプレヒコール。「ウイ・シヤル・オーヴァーカム」を歌いながら、近くの公園まで行進した。

上の写真／玄順恵夫人と、葬儀委員長の鶴見俊輔さん。式場ではスクリーンに、在りし日の小田さんの姿や反戦デモの光景が映し出された。



弔辞

鶴見俊輔

小田実はどういう人だったか。私の中の彼の姿は、黒船来航以来、日本のこの百五十年の中の大きな人、鎖国の中の万次郎と肩をならべる、今グローバル化というもうひとつの鎖国の中にさえ自分と同じ認められない大きな人でした。

今日ここにあつまってくださったことを遺族友人一同、ありがたく思っています。小田実の葬儀が終わりではないことを、私たちは望んでいます。わずかのあいだでも、これから平和にむかって歩きましょう。



「終らない旅」は何万人もの胸に

吉川勇一

小田さん、あなたが逝った日、東京では激しく雷が鳴りました。「西雷東騒」という文を関西の新聞に書き続けてきたあなたの死を、東の雷神もまた悼んでいるように思いました。

ここ2、3ヵ月、私のもとには、手紙やメールで、多くの未知の人びとから、小田さんに伝えてほしいと、お見舞い、感謝のたよりがつぎつぎと送られてきました。二〇代、三〇代のときに、小田さんの言葉や行動に触れて、人生の道筋を定めることが出来たという人びと、その後も何かにつけて、あなたの主張と行動に励まされ、自らを律することができたという人びとからの、熱いメッセージでした。その思いは、今日ここに参加している多くの人びとの胸に共有されていたことだっただけだと思います。

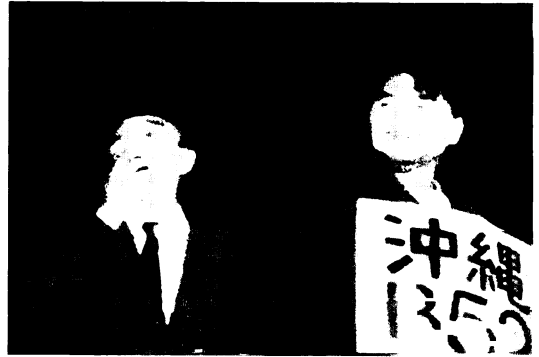
あなたの最後の小説のタイトルの通り、「終らない旅」は確実に多くの次の世代の人びとに受け継がれ、国家と軍隊と暴力から離脱し、個人として自立の道を切り開く旅は、決して終わらずに続けられてゆくものと、私は確信します。あなたは千の風どころか、何万という人々の胸の中に居続けることになるのでしょうか。

1965年、ベ平連の運動のなかで知り

合ってから半世紀近く、私は、さまざまな市民運動で、あなたとともに活動してきました。ベ平連の運動のときには、「小田と吉川の二人の組み合わせで、この運動は進められた」というようなことが、よく言われました。しかし、振り返ってみて、私の代わりとなるような人は、私の周囲にいくらでもいました。私よりも若い世代の人びとの中から、私をはるかに超えるような能力を持った人びとはつぎつぎと生まれていきました。しかし、あなたに代わられるような人はついに現われませんでした。運動に加わった知識人のなかで、あなたは稀有な存在でした。

正直言って、個々の細かい点や局面では、あなたの言うことに矛盾があったり、私に賛成できないことも少なくはありませんでした。よく喧嘩もしました。しかし、状況を骨太に捉えて、判断を述べ、進む大きな方向を示す、その点ではあなたは少しもブレることなく、常に運動の中軸にあつて信頼の置ける人でした。

何よりも、1966年にあなたが提起された「被害者にして加害者、加害者になることによつてまたも被害者になる」という主張は、1945年以降の日本の反戦平和



1968.10.20 新宿東口の演説会での宣伝カーの上の小田実さんと吉川勇一さん 撮影者不詳

運動の歴史のなかで画期的なものでした。戦争の加害者としての自覚は、こうして、以後、日本の運動のなかでの中心的な課題の一つとなりえたのでした。

その後の幾多の運動のなかで、たとえばイラク反戦の運動の中で、反戦を強く唱える作家や、評論家や、学者は多くいます。しかし、あなたのように、運動の最先頭の修羅場に身を置いて、そこで有名、無名の区別なく、ともに一人の個人、一人の市民として平等に行動を続けてゆく、そういう人を私は、残念ながら知りません。

あなたと行を共にした場面がつつぎと私の頭に浮かんでいきます。

1968年、佐世保に米原子力空母エンタープライズが入港しようとしていると

き、あなたは私とともに二人だけで佐世保へ向いました。民間機をチャーターして、空母の上から撒こうと、英文のチラシを一万枚ほど抱えて。残念ながら飛行機はチャーターできず、私たちは小さな3トンのエンタープライズを借りて7万5千7百トンのエンタープライズの周りを何度も回りました。その対比は、あなた自身、まるで戯画のようだったと言っていましたね。でもあなたはエンドレステープのように、イントレピッドの四人に続け、ベトナム攻撃から手を引くと、英語のアピールをし続けました。甲板には、耳を傾ける兵士が次第に増えてきましたね。夜は、佐世保のバー街で、上陸してきた米兵に、空から撒けなかった英文のチラシを撒きました。知らない多くの市民がつつぎとピラを持って散り、あつという間にピラはなくなりました。兵士たちは、上陸前、「ベヘイレンに気を付けろ、あれは北朝鮮の共産党系団体だ」と言われていたそうですね。翌日は、二人だけでデモをしようと、歩道の上であなたは立て看板を書き始めました。あまりに下手くそな字なので、私が手を入れました。その間にも、「小田さんですか、私も加わります」という未知の人びとがつつぎと現われ、歩いているうちに、その隊列は300人にもなり、その晩、すぐにその人びとによって「佐世保ベ平連」がつくられたのでした。

既成の大政党や大労組のデモが、「隣に見知らぬ人がいたら、気を付けてください。それは警察のスパイか、極左暴力集団の挑発者です」と呼びかけていたのに対して、あなたは、「どこへも入るところのない人いっしょに歩きましょう。エンタープライズに抗議して」という看板を掲げ、見知らぬ人びととつつぎと腕を組みました。既存の運動と異なる市民運動のあり方の典型を見る思いでした。

あなたの小説『冷え者』が、運動のなかで問題になったことがありました。被差別部落に対する差別小説だとして、糾弾の対象とされ、発行中の『小田実全仕事』の中から削除するよう要求されたのでした。ベ平連の若い人びとの中からもそれに同調する意見が強くなりました。そのときの小田さんの確固とした姿勢も私は決して忘れられません。

糾弾の対象とされた途端、作品集の中からそれを削って口を閉ざしてしまう作家も少なくないなかで、あなたは決してそういう態度をとらず、批判者の文章を共に掲載することで、その小説を出版し、世の討論に資するようにしよう、と提案したのでしたね。なんと、そうなった途端に、批判者は姿を消してしまい、あなたはやむを得ず、解放同盟員であり、作家である土方鉄さんに批評文を依頼して、それを含めた出版を実現したのでした。おかげでいま、私

たちはその作品を読むことができます。

1970年7月、岩国の米軍海兵隊基地のなかで反戦暴動が起こって弾圧が加えられているとき、たまたま岩国において、深夜その知らせを受けた小田さんは、追ってきた日本警察の車が基地正面で止められている間に、入り口の警備をしていた反戦派の米兵に通されて、タクシーで基地の中に難なく入り込み、反戦米兵らを激励してきたのでしたね。そのほかにも、あるいは1969年夏、大阪での反戦万博で、ベ平連を批判する日大全共闘などの激しい攻撃に、二人で防戦、反論に必死であったときのこと、そしてあるいは1969年4月28日の沖繩デーの日の1万数千のベ平連デモが、銀座の手前で機動隊に阻止されたとき、かなり迷い、みなと急遽相談したあとで、デモは市民の権利だと主張して、催涙弾と火炎瓶の炎の点在する大通りを先頭に立ってデモを進めたときのことなど、思いはつきつきとよぎり、留まることがありません。

あなたの死後、こうしたあなたを先頭とする運動を、「華々しかったが、空回りだったのではないか」とする意見をたまたま眼にしました。しかし、それこそ、表面的なことしか見ていない見解でしょう。阪神淡路大震災のあと、あなたが、自民党から共産党まで、議員をつぎつぎと回って説得に努め、私有財産を国家は補償しないと宣言して、市民に議員立法を

対置し、まだ十分ではないものの、災害犠牲者を公的に支援する法律を実現させたことなど、実際に勝ち取った大きな現実的成果を見ただけでも、そうした見解が皮相的なものだったことは明らかです。

今年の秋、10、11月は、あなたが『終らない旅』のメインテーマにすえられた脱走兵援助の一番初め、あの米空母「イントレピッド」からの四人の米兵の脱走から40年を迎えます。ということは、羽田闘争の40周年でもあり、エスベランチスト由比忠之進さんの焼身自殺抗議からの40周年でも



1968年1月21日、佐世保市内でのデモ。

あります。私たちは、11月17日、そのための集会を準備しています。決して後ろ向きの回顧ではなく、自衛隊の戦地派遣が続き、集団自衛権の容認の方向が強まっているなかで、ますます重要になってきている、国家と軍隊からの離脱、市民的不服従の道を語るといって、極めて現代的な意義をもったものにする予定です。あなたとともに、脱走兵援助に力を割いた多くの人がびとがそれに加わるはずで、脱走兵への援助にも加わられた鶴見和子さんの歌に「脱走兵援助の歴史アジアにて未来へ向けてうけつがむとす」という一首があります。小田さんの志を継ぐ催しになるものと信じています。

私たちの手でスウェーデンに送り出されたかつての脱走兵の一人、マーク・シャピロさんからは、「巨人のように偉大な人間、小田さんへの尊敬と哀悼の念のささやかなしるしとして、葬儀に花をお送りした。小田さんはこの世界のために実に大きな仕事をなされた。小田さんとベ平連の皆さんに、どれほどの恩義を感じているか、言葉に尽くせない」という趣旨の便りが来ていることもお知らせします。

個人的な思いを述べる時間がなくなりました。私のこれまでの人生の道筋を定める上で、ベ平連運動でのあなたと鶴見俊輔さんのお付き合いが決定的な位置を占めております。ありがとうございます。

2007年8月4日

日本が生んだ偉大な市民運動家

金大中

小田実先生が突然ご逝去されたとの知らせに接し、驚きと悲しみを禁じ得ません。ご遺族の皆様にお悔やみ申し上げ、故人のご冥福を心よりお祈り申しあげます。

小田実先生は、生涯を行動する市民運動家として貫徹され、その名声は、日本はもちろんのこと、世界的にも知られています。誠に、日本が生んだ偉大な市民運動家であらうと、思いました。

小田先生は、『何でも見てやろう』とい



うベストセラーが語っている通り、言葉と行動が一致した知識人の標本でありました。

小田先生は、人権と平和を貫徹した真の民主主義者であらうと、思いました。ベトナム戦争の不当さを指摘され、有名な「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）を組織され、大きな反戦運動を展開し、米国の新聞に意見広告を掲載されました。こうしたご努力は、日本国民に対して大きな覚醒を与え、ベトナム戦争の終息にも大きな影響を与えました。阪神大震災の時には、被害者支援のための立法運動を起こされ、多くの成果を収められたこともございました。最近では、平和憲法9条を守るため、良心的な日本の指導者の方と「9条の会」を組織され、活発に運動を展開してこられました。こうした小田先生のご業績は、ひとつひとつ数えられないほど多くございます。小田先生の一生は、我々の模範であり、また大きな激励であります。

小田先生は、私とも特別なご縁がございます。私が1980年に死刑宣告を受けて困難に直面していた時、小田先生は、日本全国を回られ、私の救命運動を練り広げて

下さいました。故人に対し、改めて御礼を申し上げます。

小田先生の生涯は、真の意味で最も偉大であり、最も成功した一生であったと考えます。我々は、日本と世界における平和と人権のための努力の象徴であった小田先生の精神を継承し、数多くの新たな「小田実」がその後につながなければならないと思います。海を渡った韓国の地において、先生のご逝去を哀悼しつつ、私も微力ながら先生のような道を歩んでいくために、積極的に努力することをお誓いする次第でございます。今一度、ご遺族の皆様には深甚なる哀悼の意を表し、小田先生のご冥福をお祈りしてやみません。

(原文のまま)

金大中（キム・デジュン）

- ・1925年生まれ。すでに政界を引退しているが、数々の迫害に抗して、民主化のため闘いつづけた韓国の政治家。
- ・1973年、東京に滞在中、KCIA（韓国中央情報部）により、ホテル・グランドパレスから拉致され、危うく暗殺されることになった（金大中事件）。
- ・1980年、民主化要求のデモが弾圧された「光州事件」の「首謀者」として、軍法会議により死刑判決をうけた。
- ・1998～2003年、大統領。その間の2000年に金正日との南北首脳会談を実現、ノーベル平和賞を受賞。

人々は彼の目標を受け継ぐ

ノーム・チョムスキー

この悲しく辛い知らせを聞いて、非常に悲しい想いです。

小田実の死去は恐るべき損失です。特に長年のあいだ、運良く彼と相知る関係にあった人々にとつて損失ですが、実際は世界にとつても損失であります。情理をつくした彼の発言と、抑圧と暴力の犠牲者への彼の深い心づかいを、世界はこれまでになく必要としていますから。

小田の偉大な業績の記憶と彼への追悼の念が人びとを動かし、彼があれほど勇敢にまた効果的に闘った目標を受け継いでくれるものと信じます。私はじめ多くの者にとつて、古くからの大事な友であり、真に得難い小田のような人物にたいし、これ以上の捧げる言葉はちよつと思いつきません。

(高橋武智 訳)

ノーム・チョムスキー…
1928年生まれ。

言語学者。生成文法理論の創始者。

マサチューセッツ工科大学名誉教授。

60年代以降、ベトナム反戦、米外交政策、メディア批判をつづける。

並はずれた器量の人間

ハワード・ジン

小田実の死去の報を聞き、妻のロズリンともども悲しい想いにかき暮れています。この並はずれた器量の人間に初めて会ったのは、1966年6月のことでした。彼と日本の反戦グループ・ベ平連のメンバーは、北は北海道から南は沖縄まで、全国をめぐって、ベトナム戦争に反対し、日本の平和運動への連帯を表明するため、一連の講演をするようにと、黑人系アメリカ人活動家のラルフ・フェザーストンとともに、私を招待してくれたからです。この滞在の多



くの期間、小田は私のホスト役でした。また私の教師兼ガイドでもあり、日本の歴史と政治について、短いながらもすばらしい講義をしてくれたものです。あるとき小田は34歳でした。同じ年の8月に、核戦争に反対する毎年恒例の集会に出るため、私は妻と広島を訪ね、そのあと東京にも行きましました。そこで、小田や森和・鶴見俊輔・武藤一羊のようなベ平連の活動家と合流し、一緒に反戦デモや抗議に参加しました。長年にわたり、小田は在日朝鮮人の権利擁護と世界平和のために闘うのを決してやめることはありませんでした。彼は現代日本の偉大な人物の一人でした。私たちは日本の友人たちとともに、彼の生涯を讃えるものです。

(高橋武智 訳)

ハワード・ジン…
1922年生まれ。

歴史学者・政治学者。ボストン大学名誉教授。

60年代以降、公民権運動、反戦運動で活動。
1966年、ベ平連の招きで来日、全国講演旅行。

主な訳書『民衆のアメリカ史』『テロリズムと戦争』『ソーホーのマルクス』

8・9・13・18・20ページの写真/2002年、ベトナムでの小田実さん。この旅は「ベ平連などベトナム反戦運動の資料をホーチミン市戦争証跡博物館へ贈る旅」でした。撮影 大木茂

デモの準備ができるまで

岡村美加代

かつてベトナム反戦デモに度々参加した。しかし、デモを最初から最後まで準備したことはない。そんな私が今回、小田実さん追悼デモの準備をするようになった。

デモするのに必要なものは何か。第一に警察にデモ申請に行くことだ。これは福富節男さんがデモ責任者を引き受けて下さることに安堵。霞ヶ関で待ち合わせて警視庁に向かう。警備課の警察官とデモのコース等を確認しあううち、参加予想人数

の話になる。福富さんは、百人も来ればいい方と言うが、警備課がそんなに少ない訳はない、葬儀には1000人近く来ると思いますが、と言う。会葬者全員がデモに参加するわけではないでしょうけれど1000人は少なすぎますよ、という先方の意見を汲んで、300人と申請書に書いた。実際には約500人が歩いたのだから、これは警察の勝ち?!

驚いたのは、デモ申請書が出るのを待つ間、「ぜひ、福富さんにお会いしたいというものがいる」と言われ、別の警察官が現れたことだ。福富さんは日本で最多のデモ申請をした人といわれている。その人物に一目会って見たかったという警察官との間で、昔のデモの話、警備にあたった警察官

の話等、話はずんだ。そして、最後にそろって「この頃は大きなデモがなくなりましたね」と溜息をついたのが私には印象に残った。

第二に、宣伝カー、横断幕の準備。これは旧ベ平連、旧日市連などの市民運動のメンバーが担った。宣伝カーがみつからず、レンタカーかなと思っていたところ、間際になって市民の意見30の会の人から手配できたと連絡をいただき、一件落着。

横断幕の言葉は、吉川勇一さんと福富さんの助言を活かしつつ、皆で相談して決めた。これが今回のデモのタイトルにもなった。「小田実さんの死を悼む 反戦の遺志をついで」文字はパソコンで打ち出したものを拡大コピーして布に写した。こういう作業、以前は手書きで書けるプロ級の人がいたのにね、と皆で笑う。作業中のおしゃべりで、小田さんの写真を持ってデモを歩きたいという意見が出た。これは、小田さんのベトナム旅行に同道した写真家の方がパネルを作って下さることで解決。後日デモの写真を見たら、パネルの中で笑っている小田さんがデモの先頭で「すべての戦争に反対!」といいながら歩いているように嬉しかったものだ。また、ビラは、会葬者

の皆さんにデモを知らせるものと、沿道で配るものの2種類を用意した。五日間という短い間にデモを企画し実行するということは、想像以上に変なことだった。それをこなすことができたのは、まず第一に小田さんの人と人を結びつける不思議な力、そして、全体の流れの中のどこに自分が位置し、何をすれば良いか、一々相談しなくても協力しあえた皆の力があつたからだ。

小田実さん、本当にありがとう。
そして、さようなら。

(おかむら・みかよ、旧ベ平連少女女団)



デモの後、近くの公演でミニ集会。関西からは「小田さん、市民議員立法ありがとう」の呼びかけが。

追悼・私にとっての小田実さん

予感された遺書

I・N

選挙の記事で隅に追いやられるように、小田さんの計が報じられていました。九条改憲の動きが急を告げる中で大切な人を亡くしました。

3年前に出された『随論日本人の精神』を読み終えたところです。本は最後に「ホナ、サイナラ」という言葉で終わっています。この日あるを予感された遺書のように思われてなりません。九条実現を身をもって行動されたことにあらためて敬意を表し、謹んで哀悼の意を表します。

むさしのから風の便りにのせて
(ピースポートの世界一周に参加。昨年、「逆打ち四国霊場108か所巡礼の旅」で九条実現を訴える)

フオークゲリラ開始の頃

伊津信之介

オダマコトは、僕の考え方の父だ。これは僕が勝手に思っていることだが、そのわけを話そう。浪人2回目大学受験生が、何気なく参加した「ベトナム戦争反対」の

デモは楽しかった。何回か参加する内に同世代の少年少女の新鮮な発想と行動に惹かれ、高校時代からの友人とギターを持ってデモに加わるようになった。それは関西の連中がやってきた事に触発された行動だった。1969年の冬、大阪の坂本さんやピ

ンクが東京のベ平連デモで反戦フオークを唄いながら歩いた。その後、新宿駅西口地下広場を通りがかって、「いいねえ、梅田地下街よりいいかも」ということで始めたのが、フオークゲリラ開始のエピソードだ。

中央集権的発想が当たり前の日本で、反戦運動が個人の自由と責任で広がり、効果を生み出す事に心を奪われた。今思い返せば、フラット・リンク・シェアという現代を象徴する動きを先取りしたのが、オダテンの行動と思想だった。それから約40年間の僕に、最も影響を与え、思考の原点にあったのは、オダテンであり、ナイカクと呼んでいた30〜40代のベ平連を支えた人々だった。何か読むべき本がありますか？と小田さんに尋ねた時に、ナットヘントフのジャズカントリーを読んだらいいと薦められた。

いつの間にか小田さんの語る内容は、僕の考えにとけ込んでいった。もちろん小田さん以外にもいろいろな人たちの影響を受けたのが、1968年から1970年頃の

数年だった。「論理と倫理を区別して考えないといけないよ」と言ってくれた人がいた。この言葉は僕の思考回路の大事な分岐になっている。

ベトナム戦争反対だけの運動を始めた小田さんと同じ発想で、新宿駅西口地下広場で反戦フオークを歌い始めた当時、歌い手の数が変わった。僕は人を立ち止ませることはできなかったが、仲間のゴリには人垣ができた。そのパフォーマン스에相応しい人がいるようだと感じた。小田さんもベトナム戦争反対のパフォーマン스에相応しい人だった。それは既成の運動とは違う『発想』『スタイル』『パフォーマンス』であった。1970年代後半から日本ではこんなパフォーマンスも受け入れられなくなつた。金もうけが全て。閉塞感に覆い尽くされ、息苦しい時代が今に続く。

1960年代末に小田さんたちに学んだ僕は、僕なりに考える、考えこむ前に行動する、ことを模索してきた。しかし新宿駅西口地下広場のフオークにまつわるさまざまな出来事は、単純な思考を超えるものであった。『効果』を高めることが『目的』といった判断をしてしまうことは危険だ。人がたくさん集まることは、効果的で、目

的達成に近づくという発想を僕は嫌ってき
た。その反面で効果を意識して考え、行動
する自分がいつの間にか現れる。

僕も60才を迎えた。これからは、効果を
考えない。効果を考えてしまったら、そう
でない選択を十分に模索する。慎重になる
という訳ではないが、目的のために功利的
にならない自分をつくっていきたい。

(いづ・しんのすけ、東海大学・福岡短期大学情
報処理学科教授)



ベ平連発足当時の小田実。代々木ゼミナ
ルの寮で。小田は、寮の舎監をしていた。

母・娘の2人で

内山孝子
内山 唱

小田さんにはじめてお会いしたのは、中
国からもどられて84年『毛沢東』を出版さ
れた頃でした。当時娘の子育てをしながら

小田さんの本を通して社会のあり様を学ん
でいた私は、85年の平和の船に乗船する
チャンスがやってきました。

まだ5歳だった娘を残しての旅は、少々
後ろ髪をひかれる思いだったのですが、小
田さんと一緒に旅にいける喜びが強く、と
てもウキウキ状態でした。知らないものを
知る三国訪問の旅は、言葉では表現できな
いくらい感動の旅でした。そんな娘が、今
27歳になり、今では共に小田さんのファン
となり、講演会には一緒に参加したり、共有
できる時間をつくれるようになりました。

娘は、最近小田さんの本を読み始めて
います。私にとっても小田さんの市民に向
けられるまなざしが、とても生きる希望で
した。小田さんのご葬儀の後、娘と一緒に
歩いたデモの道のりは、とても悲しいけれ
ど、意義深い時間となりました。

小田さんがいなくなったことは、とても
残念ですが、心の中にずっと生き続けてい
くと信じます。そしてとても感謝の気持ち
で一杯です。

(うちやま・たかこ、平和の船の第1回航海に乗船
法政平和大学に参加、専業主婦の勉強会を開く)

シンガポールから先月里帰りをしていま
して、昨日の小田さんの葬儀にも母娘で参
列することができました。母娘ともに今朝
はちゃんと眠れずに朝方起きてしまいまし
た。母はたぶん人生の半分以上を振り返り、

眠れなかったのではないでしょうが。

私は昨日の場所で体験した、先輩方の歩
かれてきた歴史や思いに直面し、よく言わ
れています「最近の若者は何にも考えない」
に自分が属しているように思え、現実に向
き合っていない自分がとても恥ずかしくな
りました。

また、デモにも小学生のときに手を引か
れて歩いた以来に参加しました。歩いて本
当によかったです。もっともっと勉強しま
す。もっともっと敏感になります。またシ
ンガポールへ戻りますが、向こうでできる
こと、いろいろ考えながら歩いていきたい
と思います。

(うちやま・しろう、大学のゼミで沖縄戦を学び、
沖縄戦体験者の聞き取りをする)

小田さんの大きな手

大木晴子

2002年の春と初夏、二度のベトナム
は小田実さんと一緒に旅でした。

最初の旅でホーチミン市チョロン地区に
ある活気を感じる寺を訪ねました。このの
神さまは雲に乗って自由に旅が出来るため
遠い海でも人々を助ける航海の安全の守り
神と言われています。この寺で天井から渦
を巻いて垂れ下がるお線香を小田さんは捧
げ祈られました。



大きな手を頭の高さに挙げて祈られました。小田さんは、世界を歩き悲惨な死をとげなければならなかった多くの御霊と出会った方。あわせた大きな手に込められた平和への願いはきつと・・・と私はその光景の中でシャッターを押しながら思っていました。この旅でその大きな小田さんの手で私は背中を叩かれました。

話の前後は覚えていないのですが、「何かこうなったらいいのになあ」と希望を言うと「あんたがやればいい。」と言われて大きな手は、私の背中に痛みとそして優しい温もりを残し、それは何時しか勇気という力になって育っていききました。私はベトナムへ行った次の年、イラク戦争が始まる一ヶ月前から、昔、フォークソングを歌っ

たあの新宿西口広場で反戦の意思表示を始めました。今年、五年目に入りました。毎週土曜日、10人〜20人弱の人たちが自分のプラカードを持ち立ち続けています。私はホームページでその様子を書き続けています。これからは、もっと小田さんの大きな手の温もりを感じながら平和を育んでいきたいと思っています。

（おおき・せいこ、「明日も晴れー大木晴子のページ」主宰、元ベ平連フォークゲリラメンバー）

後に続く者たちが無数に

KY生

「九条の会」、「ベ平連」元代表の小田実さんが 7/30亡くなられた。

安倍自公ファッショ政権の惨敗のニュースが届いたかどうかはわからないが、象徴的な日になくなられた。

私事になるがイラク戦争開戦以来、反戦平和の運動の片隅におずおずと参加し始めた私にとって、小田さんの書いたものや講演などがどれほど力になったか、勇気づけてくれたかわからない。

安らかにお休みください。あとに続くものたちがきつと無数にでてくるでしょう。

（サラリーマン（技術者）、マイペースでパートタイムに反戦平和運動を実践）

あの頃の志を持ち続けながら

静岡県・YK

弔辞を読ませていただきました。心を揺さぶる弔辞です。60年代末から70年代初め、浜松でベ平連を担った者として、そして吉川さんと浜松市街をデモした者として、今回の小田さんの逝去には、いろいろ考えさせられます。葬儀にはいけませんでしたが、出棺の際拍手がおこったそうですね。私も拍手をし、そしてありがとうございました、としたいと思います。

大阪反万国博に参加し、そこではじめて小田さんの顔を見、早口の弁舌を生で聞きました。高校生の時でした。それ以後、東京の集会等で小田さんの声を聞く機会もありました。

私もあのころの志を持ち続けながら生きております。これからもそのつもりです。（高校生の時、浜松ベ平連を結成。以後ずっと反戦平和・戦後補償などの運動に関わる。）

小田さんの遺志を未来に

次田哲治

私が初めて小田実さんに出会ったのは八王子で開催されたアジア人会議でしたが、今日は奇しくも八王子に住んでいる子ども

の所から会場に向かいました。

私も私の連れ合いも、京都ベ平連のメンバーでしたし、京都ベ平連の飯沼二郎さんの追悼集会の折りに鶴見さん、吉川さんと一緒にしています。

今日は、学生の頃に一緒にした吉岡忍さんなど、30年以上ご無沙汰していた懐かしい方々にお目にかかれて本当に元気をいただいたと思います。これも小田さんのおかげと感謝しています。

本当に嫌な世の中になってきていますが、もう一度、小田さんの遺志を未来につなげられるのか、自分なりに努力してみるつもりです。

(つぎた・てつじ、公立夜間中学教員。高校時代にベ平連に。以後、平和・人権・教育を考える市民運動に関わる。)

終わらない旅は残った者の中で

村雲 司

70年の頃だったろうか。清水谷公園を出発したデモが途中からフランスデモになった。先頭を歩いてきた小田さんの提案だった。両手を上げて、周りに呼びかけているようすが見えた。6車線もある道路一杯に手をつないで歩いた。空がきれいだった。一人一人の人間が主人公なんだと嘯み締めるように実感した。みんなの心を何時もワ

クワクさせ勇気付けた、あの小田実さんが亡くなった。

今年の2月、新作刊行記念の小田さんの講演を聞きに行った。僅か60人程の会だったから、例の睨みつけるようなギョロ目とその奥に滲む優しさを間近に感じる事ができた。今、市民運動は個々の課題に取り組むばかりで、全体として手をつなぎ合っていて、より大きな力となり得ていないことを嘆きながら、全部をつなぐものは憲法だと語った。たとえば障害者の問題も基地の問題も、憲法が保障している人権を守るということなのだからと。

新作の題は『終わらない旅』。まだまだ終わらぬ強い意志を感じたのだが……。終わらない旅は、残った者の中で続いて行く。

終わらない 旅終えて逝く 夏の雲

(むらくも・つかさ、敗戦の年に生まれる。俳句余想「梅が丘通信」編集・発行人)

どう運動を継承していくか

西田まりあ

いigo葬儀でした。改めて小田さんの偉大さと日本の運動に果たした影響の大きさを感じました。吉川さんの弔辞に涙がでそうになりました。若い時の小田さんと吉川さんが船にのって抵抗運動を展開した映像



佐世保に入港した原子力空母エンタープライズの周りを回る小船、中央の立っているのが小田さん。小田さんの右が吉川勇一さん。手前は当時広島にいたアメリカの活動家R・レイノルズさん。

(右の写真)を見て、小田さんは、体をはって運動をやった方なんだということがよくわかりました。今、インターネットでも、若手活動家のなかで、小田さんの訃報と業績をたたえるメールやメルマガが出回っています。小田さん、ベ平連の運動が今の若手にやはり、すごい影響を与えているということがわかります。デモのあと、小中さん、吉岡さんら当時のベ平連関係者と交流しました。ベ平連の運動がいかにすごかったかを改めて感じるとともに、どう運動を継承していくかについても考えさせられました。(にしだ・まりあ、和・ピースリング、10・21「浅草ウォーク」実行委員)

小田・文学・デモ

福富節男

谷崎潤一郎のいっ

1967年であったか、68年のことだかおぼろげになってしまったが、ベ平連の内閣と言っていた連中で、熱海にいった。熱海だったか、箱根かもあやしい。だがつぎのことは明瞭に憶えている。電車の窓を背にした席で小田とならんですわった。ほかの人たちとは離れていた。わたしは小田に作家で誰が好きかときいた。かれは「谷崎だ」といった。谷崎のどれが？とかさねて訊ねると、即座に『猫と庄蔵と二人の女』という答えがかえってきた。東京に帰って読んでなんとなく納得した。小田の長編のなかで、人が重要な作品というのは『HIROSHIMA』はじめさまざまだろう。『玉砕』はあまり良いと思えない。読者は背景の思想からめとられるのだろう。米軍爆撃機の機種で異論を言ったが、現地で聞いたと彼はゆずらなかつた。私の好みをいえば初期の小説『現代史』だ。戦時中九州大の医学部の教授たちが起こした捕虜米兵の生体解剖事件に助手としてかかわったことがトラウマとなっている男の物語だ。

主人公の付き合うブルジョワの世界の話題にベトナム戦争も登場する。小田はこういう舞台装置で時代全体をとらえる小説をめざしているのだが、多くの作家の若いときの作品に共通する意気込みが感じられ、小説としてこころよい。吉川勇一が『現代史』を『細雪』だというと、小田は怒るんだが、内心は嬉しいらしい」といっていた。最後の旅行がハーグでの、アロヨ比大統領とブツシュを裁く国際民衆法廷であったことが示すように、日本や世界の政治のさまざまな状況が絶えず押し寄せてきて、小田にはすべて放っておけないものであった。彼の作品はそのような方向にひかれていった。『猫と庄蔵』を書くような境地はずうつと遠くかもしれない。そしてついに限りなく遠くにいつてしまった。

『冷え物』のいっ

小田が69年に「文芸」に載せた『冷え物』が部落差別小説であると、関西部落研という学生らが、71年3月ベ平連の事務所へ糾弾に来た。大学闘争の雰囲気を感じていた。小田は不在だったが、彼を糾弾し、殴

りもしたらしい。それなら私は隣にいてまず殴られてやろうと本気で考えた。小田はこのような暴力を位置づけられないだろうが、私は軍隊の兵卒時代に散々殴られ、そのばかばかしさに慣れていくからだ。ベ平連の事務所全体がこの問題に覆われた。小田自身は『冷え物』と差別問題に真剣に向かい合い、遂に彼は十二指腸潰瘍となり、入院となった。腹腔内の太陽神経叢がダメージを受けたということである。お兄さんが助教だったか、徳島大学医学部の病院で長期療養になった。私は見舞いにいった。神戸から小型水中翼船でいった。浮遊している大きな丸太に水中翼がぶつかるとどうなるのかと不安だった。病院の個室で話したことの大半は忘れた。「体にメスを入れられるのはたまらんだ」というのをきいて、彼の肉体的、物理的暴力の非暴力主義は本当に小田自身から発していることを信じた。そのときは威張ったところもなく、率直な話しぶりだった。今は記憶の量があまりにも乏しいのが残念である。

鳥瞰図と虫取図のいっ

1965年4月24日 ベ平連の最初のデモに小田はアピールを書いている。「私たちはふつうの市民です」で始まるのである。そして末尾に『ベトナムに平和を！』市民文化団体連合 つまり ふつうの市民」と太字で書く。デモを政党や労働組合が組織

し指図するものとしてでなく、一般の個人のこととしたかったのだ。ふつうの市民とは、小田の言葉でいうと「虫瞰図」で地を這いつくばるものことである。鳥瞰図ではない。小田自身は大所高所から全体を把握する方だったと思う。小田の「虫瞰図」はベ平連の中で、実際のものになった。例で言ったほうがわかりやすい。米脱走兵援助の状況の話が出た。「その家に入ったから、婆さんが沢庵食わせているのよ」。こんな話が、小田に虫瞰図といわせる材料になる。東京の「神楽坂の」ベ平連の内閣（事務局のニックネーム）でそのような言葉、話ができることもベ平連に活性を与えた。内閣の年配者はみなインテリの連中だった。そういう人たちが、めいめい虫瞰図を獲得していった。米軍基地で直接米兵に反戦をよびかけ、基地監視運動に発展する。全国各地に勝手に、その地の名を冠したベ平連ができてゆき、前記のいわゆる内閣に若い人びとが入りし、ベ平連少年少女団と名乗る連中も出入りする。さまざまの「虫」連中が這いつくばるのである。その結果虫瞰図が、小田や皆の心のなかに実体となった。小田の優れた造語の「難死」については書く余裕がない。個人の名を挙げるのはさげすみよう。吉川は自らこの追悼集に書くだろう。例外として一人古屋能子の名をあげておきたい。後に小田の書くものの熱心な読者となる古屋は一人で新宿の街角にたつて、ベ

トナムに医薬品をおくる「平和の船」のための募金を始めた。そうして「新宿ベ平連」ができた。彼女は私より1歳年下で、25年前に死去した。葬儀のあと、ある人が「古屋のおばちゃん」の棺を赤い旗にくるんで火葬場まで行きたかったと言った。

話し方

小田は集会、デモでも演説調でなく話した。小田は語った。古代ギリシャ語は大衆に政治的信条を語るのに具合よくできていた。日本語にはお座敷や四畳半でしゃべる言葉と広いところで大勢にむかってしゃべる言葉がちがう。織田信長が戦陣に出かけるときに、軍勢を前にどう演説したろうか。「人間五十年、下天のうちをくらぶれば……」というお定まりの話しかない。私は一つの問題を感じた。それから私はデモ屋になった。不特定多数へ、どう言葉をとどけるか？ コミュニケーションがなりたつか？ いわば非日常から日常への橋がかけられるか？ 橋は架からないのか？

やってよかった、葬儀のデモ

小田の葬儀のときにデモをしようと言い出したのは、かつてベ平連少年少女団などといっていた連中、あるいはその少し上の連中、日市連の初めのころの連中だ。いまは中年となって、日頃はそれぞれの生業で手一杯である。ベ平連が輝いていた、あの

時代こそ彼らの青春であった。それを突如心に甦えらせたのがベ平連の良き時代の力であろう。彼らが集まってあつという間に、デモの準備をしてしまった。何十年ぶりのことだったろう。かつての若者の望みを耳にして、私はデモの届け出もし、責任者にもなろうと決心した。しかしデモのはじめの挨拶やコールをするのは遠慮したかった。私にも「年甲斐もなく」なんて言葉が棲みついてはいる。しかしデモの列がととのった以上、ぐだぐだしていてもはじまらない。出発の合図もコールの音頭もやった。コールは「軍隊はいらない」「あらゆる戦争をやめよう」だけ。先頭からはウイシャルオーバークラムを歌う女の人の声が流れた。デモ準備の連中に近い写真家が、先頭に掲げる写真を急遽作ってくれた。珍しい柔らかな微笑みをたたえた肖像は口が半開きで、一緒にデモを歩いてコールを共にしているようだった。会葬者約800人、500メートルのデモを歩いたひとは450人ということであった。はなむけのデモであった。たくさんの老年、中年のなつかしい顔ぶれがあった。終わりにごく短い集会をした。ドイツから来た人もいた。大半の人たちがその終わりまでいた。書きたいこと言いたいことを山ほど残して去る小田の無念の思いはどんなに大きかったことか。

（ふくとみ・せつお、数学者、元ベ平連）

小田さんが遺した言葉

吉岡 忍

繰り返しに耐えるのが物書き

小田実さんが亡くなった日の早朝、私は共同通信に求められ、各地の地方紙に掲載される追悼文を書いた。数日後、日本経済新聞からも短い文章を求められて書いた。三回目だが、この文章である。いくら何でも同趣旨のことを三回も書くのは、きつい。

「あのな、吉岡。覚えとけよ」

と、小田さんに言われたことがある。

小田さんがベトナム戦争について、日本政府がアメリカ政府の言いなりにその戦争政策を支持していることについて、新聞や雑誌にさかんに批判的な文章を書いていたころのことだ。私は20歳になるかならないかだったが、「ベ平連ニュース」の編集長をやれと言われ、事務局長役の吉川勇一さんに手取り足取り教えてもらいながら、記事を書いたり割り付けをやったりしていた。その頃のあるとき、私は小田さんに向かって、この趣旨の文章、このあいだ新聞にも書いていたでしょう、みたいな生意気なことを口走った。すかさず小田さんは言った。

「繰り返しに耐えること。それが物書きやで」

早口の、断言するような口調と、そのあとで、アハハッと大声で笑った声とともに、私はこの言葉をいまでも覚えている。繰り返しのところか再掲というのは、その言いつけを守ることになるかどうか怪しいが、ともあれまずは共同通信に書いた追悼文を以下に掲げておきたい。

どこにいても作家だった人

暗い朝が明けた。数時間前、小田実さんが息を引き取った。朝刊に「自民大敗」の見出しが躍っている。私は読む気がしない。こんな程度のことで一喜一憂するな、という声が聞こえてくるような気がする。私は67年春、18歳のとき、ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）のデモに行き、『何でも見てやろう』の作家に会った。小田さんはずだ袋のような鞆をポンッと叩き、「銭湯に行くときでも、原稿を持ち歩いとるよ。留守中に火事になったら、パーヤロ」と言った。作家とはこういう人か、と私は目を見張った。

2年後、反戦キャラバンで北海道をまわった。小田さんが持ち歩いてきた濃緑色の重い鞆に、分厚い原稿の束が入っているのを見た。1972年、体調を崩し、徳島市で入院中だった小田さんにスリーブを届けたときも、ベッドには書きかけの原稿が広げてあった。

70年代の終わり、文学者の国際会議に出席するためモンゴルに行った。ゴビ砂漠の町まで飛ぶ機中、小田さんはノートを広げ、メモしていた。旅日記ですかと聞くと、「小説や。旅行しながら書くのは疲れるな。頭を切り換えるのが大変よ」と笑った。

数年後、新潟港から旧ソ連や中国をめぐる船旅に出る前夜、私はコーヒールをいれ、小田さんの部屋に持っていった。出航前に投函しなければならぬ原稿がある、と聞いていたからだ。カップを置き、部屋を出ようとしたとき、背後から小田さんの声が響いた。

「人間にはな、絶句する瞬間があるやろ。そこに社会の矛盾や歴史の重みがかかってきて、そのことに気がついて、言葉が失うような瞬間が。そこでつぶされそうになっている人間を書くのが小説や」

小田さんは、個々の人間の背景にあつて、人間を動かしている世界像を描く全体小説に取り組んでいた。すでに長編小説『現代史』『HIROSHIMA』を

書き上げ、それを上回る、10年がかりの大作『ベトナムから遠く離れて』を書き始めた時期だった。

2002年3月のある日、私たちはホーチミン市において、サイゴン川を眺めるホテルのレストランで向かい合っていた。高い窓から射し込む朝の光が、だんだん濁ってくる時刻だった。ベトナム戦争当時、反政府ゲリラの青年が公開処刑された広場か、腐敗した権力者たちの巣窟だった旧大統領官邸に行ってみませんか、と誘うと、小田さんは「原稿が終わらんよ」と、元気がなかった。

昨年末、新作小説『終らない旅』を読んだ。若き日のアメリカ留学、ベトナム反戦と脱走兵援助、阪神大震災と歩んできた人生を、小田さん自身がひっそりと回顧するような物語だったが、あるページにきたとき、私は「だまされたッ」と大声を上げそうになった。

老境に入った主人公がホーチミン市に行き、まったく偶然にアメリカ留学時代の女友達と再会するシーンがある。物語の転換点となる重要な場面である。その場所こそ、私と小田さんが座っていたあのホテルのレストラン、あれと位置や光の加減まで同じテーブルだったのだ。

どこにいても、どんな体調のときも、小田さんは作家だった。市民社会が在るかなさかのこの国で、ベ平連やその他の



市民運動が教条主義や内ゲバに巻き込まれずにすんだのは、絶句し、言葉を失う人間の姿に目を凝らしつづけた作家のおかげだった。

小田さんが最後の入院をした翌日、私はお見舞いに行った。病室に次の小説の資料だという洋書が山積みになっているのを見て、私は一人うなずいていた。そこに、最後まで作家であることを貫き通す小田さんの志をたしかに感じたからである。小田さんのいない暗い朝、もっと人間に目を凝らせ、と語る作家の声が私の耳に鳴り響いている。

無愛想さのかけに

ある人たちには違和感を感じさせるかもしれない、と思いつながら、私はこの追悼の

文章を書いた。なぜなら、ここには小田さんが精力的に動き、作り出した市民運動や政治活動についての言及があまりないからだ。

小田さんはさまざまな政治的発言を行ない、言ったとおりの行動もしてきた。散華ではなく「難死」の思想、被害者になることよって加害者になっていくカラクリの指摘、政治的慣行や生活実感を超えた自前の国際主義の実行、日米安保体制に対する持続的な批判、「共生」という言葉の提唱、災害被災者支援のための市民立法、九条の会での講演活動……。作家という肩書きに収まりきれない大きさが、たしかに小田さんにはあった。

だが、不思議な気がする。こうした発言をするときの小田さんは、あまり幸せそうではなかった。笑っていてもいなかった。身構えた表情になり、ときどき怖い顔を見せ、たいていは無愛想だった。大事なことを語り、書いていくからそうなのだ、というのは明らかにちがう、それは独特の無愛想さだった。なぜそうだったのか、私にはうまく説明できないのだが、それでもひとつ思い当たる節があるとすれば、小田さんは発言したこと、そこから始まる活動や運動の責任を一身に背負う覚悟をしていたからではないか、と思う。あちこちから飛んでくる批判や揶揄を受け止めるのは自分なのだ、と考えていたにちがいない。

べ平連にかぎらず市民運動は、参加者一人ひとりの考え、好み、都合、責任を重視する。言い出した人がやる、というのが原則だ。だから、小田さんは他人の分まで責任を感じる必要はなかったはず、というのは、世間知らずというものである。小田さんはいつも、そう自分が名乗るか名乗らないかにかわりなく、何かの「代表」であり、「顔」だった。そうして、陰湿な部分が少なくない文壇とかアカデミズムとかマスコミの業界には、ちよつとでも目立ったりすれば、必ず足を引っぱったり、けなしたり、冷笑したりする空気が漂い始める。そこは世間一般とかわりが無い。つまり全然、市民社会ではないのである。

小田さんはそのことをよくわかっていて、と私は思う。意気投合したはずの作家や学者が離れていき、いつもまわりにいた編集者や記者が、ふと姿を現わさなくなる、という苦しい思いを何度も味わったと思う。あるとき小田さんは言った。「きみらの世代でベトナム反戦や全共闘をやって、あとで物書きや学者になったやつは何人もいるが、経歴を見ると、全部そのことを消してある。どうしてなんだ」と。

答は簡単だ。わが身を振り返っても言えることだが、どこから飛んでくるかわからない批判や揶揄を一身で受け止めるような位置に自分を置いたことがないからである。そういう厳しくも寂しい経歴をしたこ

とがなければ、人はあつさり自分の過去や経歴を曖昧にすることができる。

私は小田さんが何ごとにも一貫していて、責任感が強かった、などということを書きたいのではない。そんなことを言ったら、「君子豹変」を口癖にしていた小田さんは噴き出すに決まっている（小田さんが君子を気取っていたわけではない。豹変を實踐していたという話である。為念）。

ただ、『何でも見てやろう』からべ平連を経て、被災者支援の立法や九条の会の活動に至るまで、その発言と行動が一方で注目され、他方で批判や揶揄にさらされつづけた小田さんには、一般の作家にかかるそれとは比べものにならない重圧がかかっていただろうことは、私にもわかる。いつも身構えていなければならぬ立場に、小田さんはいた。あの無愛想は、それゆえだったのではないだろうか。

しかし、小田さんは政治家にはもちろん、市民運動の専門家にもならなかった。あくまで作家でありつづけた。作家は、一人で歩き、一人で考え、一人で幻を見、一人で書く。私も何度か居合わせたことが、小説の話をするとき、小田さんにはにこにここと、饒舌だった。政治向きの話をするときは別人のようだった。

「人間、そんなもんやろ」

先の追悼文でも触れた日本海の船旅のと

きだったろうか、私は小田さんにふたつのことを聞いた。べ平連でも、他の集会でも、演説しますよね、ああいうときどんな感じなんですか、使命感みたいなものですか、というのが最初の質問だった。小田さんはとつさに手を横に振った。

「ちやう、ちやう（ちがう、ちがう）。そんなんと、ちがうで。もう一人の自分がおつてな、ちよつと頭のうしろの方から、『やつとる、やつとる』と、冷やかしながら見ているような感じだな」

冷やかすって、だれを？

「おれよ。おれのことを、もう一人の自分が突き放して見ているのよ」

もう一人の自分というのは、作家の小田実ですか、と私は聞いた。

小田さんは、うなずかなかつた。しばらく窓の外を眺めていたが、そのうちに始めたのは父親の話だった。

小田さんのお父さんは、戦前、大阪市の公務員だったが、上司と喧嘩をして辞め、弁護士になったという人である。全然売れない弁護士だったというが、当時の大阪では珍しかった洋館を建てた。そこが少年時代の小田さんの家となり、空襲や闇市体験の、さらには高校生で始めた小説執筆の場となった。

父親は晩年、書齋にあつた裁判資料や法律書の整理を始めた。かたわら、繁華街の高級果物店やデパートに行つては、なぜ

かたくさんメロンを買ってくる。このころになると、もちろん小田さんは同居していないが、デパートなどから次々に配達されてくるメロンの処理にずいぶん困ったらしい。

そんな話をしたあとで、小田さんはお父さんが亡くなったあとの書斎を見たときの驚きを口にした。

「何にもないのよ。本棚にも机のなかにも、紙一枚残っていなかった。あれは、みごとだったな。最後は無一物。みごとにからっぽ。残ったのは、ただの人よ。人間一個。ちよっと感動したな」

そういうのが、小田さんも理想だ、と？
これが私の二番目の質問だった。

「人間、そんなもんやろ」

小田さんはそう言って、アハハッと笑った。それが個人、それが市民、いや、それこそが人間というものの原型なのだろう。そういう話として、私は聞いた。

(よしおか・しのぶ、ノンフィクション作家)



遺されて出来ること

澤地久枝

小田さんの病氣を知ったのは、五月三十一日。大西洋をわたりブエノスアイレスへ入港した日だった。命の時間が切られる重態という。なんとか生きのびてほしいと祈った。しかし、小田さんは参議院議員選挙の自民党大敗を見届けるように七月三十日未明、七十五歳の人生を閉じた。

九条の会はどうなるのだろうか、船旅の一カ月半、私は自問自答した。旅の楽しさは後景へしりぞき、船脚がのろく感じられた。人生の同行者と呼んだ二十歳年下の伴侶 玄順恵さん、一人娘の小田ならさん。小田さんはよき夫、よき父、そしてよき同時代人として、かけがえのない人だった。

政治が間違えた選択をするとき、それを実行させられるのは小さな人間。小さな人間が揃っていやだといえ、政治はなににもできない。戦争を例にとれば、答えは明白。それだけ小さな人間の力は強い。小田さんはくりかえして小さな人間の強さを言い、社会変革の可能性もそこにひそむと言いつづけた。

今日、書店の店頭の小田さんの本はない。彼が手にできなかった玄順恵さんの『私の祖国は世界です』もない。よく売れているのだ。注文してとつてもらうか、増刷を待つしかない。小田さんを喪った悲しみが、水のしみるように静かにひろがっているのを感じる。

判断し実行する人であった小田さん。やり残した作家としての仕事は、誰もつげない。彼は作家としての執着を押さえ、市民運動の先頭に立ちつづけ、そして倒れた。

小説『終らない旅』を読むと、小さな人間を核とする市民運動の方向、世代をこえ、親から子、さらに孫へと伝わることへ、小田さんの不動の思いが伝わる。高校生くらいの読者にもわかるように、この国の六十年の歴史が混然として物語を織り出している。

悲しいけれど、彼の志をつぐことを考えたい。なにも出来ないと思う人は、本を読むことから始めるといい。

(さわち・ひさえ、作家「九条の会」呼びかけ人)

「日米平和友好条約」と「市民軍縮」と

——小田さんの貴重な提案と構想——

吉川 勇一

小田さんは「空回り」ではない

反改憲派の意見を、およそ実現しそうな理想を理念的に唱えているだけで、非現実的だとする批判が繰り返されている。小田実さんの死後、小田さんへの評価にも、「彼の華々しい活躍も、結局空回りだったのでは」という意見を目にした。〔東京新聞〕7月31日の記事の中のむのたけじさんの評。)

私はこれにまったく賛同できない。たとえば、日本は武力をいっさい持たない「良心的軍事拒否国家」になれば、小田さんは提案した。それはすでに世界でもトップクラスの強力な軍隊となっている自衛隊という現実がある中で、ただそれをいきなりなくせ、と非現実的な注文をつけただけだったのだろうか。いや、決してそうではなかった。小田さんは、何かを提言するとき、理想をただ観念的に語ったことはない。考えに考え抜いた上で、市民が努力すれば実現可能な方法を必ず具体的に提起した。たとえば、自衛隊についても、それを即刻無くしてしまえ、などとは言わなかった。彼が提起したのは「市民軍縮」ということだっ

た。

小田さんはこう言っている。

……そして、私たちは、今、こうした災害対策の問題にかかわらず、もつと大きく国全体のあり方として、市民の側から「軍縮」——「市民軍縮」を提起し、実現すべきときに来ていると思います。今まで市民の側は「平和憲法」の幻想にもたれかかって、実質的にいかに「軍縮」を市民の側から具体的に提案し、実現して行くかについて実際に考えて来なかったし、また、もちろん、実現にむかって具体的に努力して来なかったのですが、今や、政府側が新「ガイド・ライン」設定の大義名分の下、「後方支援」やら何やらで市民をじかに「戦争主義」の政策、そのはてのアメリカ合州国の「世界戦略」のなかにまき込んで行く時代です。私たち市民の側で、われわれはここで、この自分の都市の「無防備都市宣言」を行なう、そのためにはこの自分たちの都市から自衛隊は出て行ってもらおう、基地はやめてもらおう、あるいは、この自衛隊の駐屯地は大きすぎる、もつと縮小しろ、兵員も半減せよ、装備もこんな重火器が要るも

のではない、やめよ——というぐあいに地元軍備から始めて、初年は全体で軍備の一〇パーセント減、次の年は、潜水艦三隻を廃艦、この揚陸艦は遊覧船へ転用、「民活」——と市民が地方自治体とも協力しあって計画をたて、それを市民に「情報公開」して削減を実行する。

こうした「市民軍縮」はそれこそ「官民」共同でできることだし、すべきことではないでしょうか。……(小田実「ひとりでもやる、ひとりでもやめる——「良心的軍事拒否国家」日本・市民の選択」筑摩書房 2000年刊 156ページ)

自衛隊の非軍事化の具体的方策

小田さんは、「これは、ただのユートピアの夢物語ではありません。十分に実現の可能性のある現実の問題です」とも続けている(同書157ページ)。

小田さんは、現実にある自衛隊をどうするのかについても提案する。市民意見広告運動が出して大好評の『武力で平和はつくれない』(合同出版)には次のようにある。

「……私たちが提案する『災害救助隊』は、被災者を治安の対象とみなさない、非武装の救命・救助の専門集団です。たとえば、作家の小田実さんは、自衛隊の救援活動部門を非軍事化して、アメリカの危機管理庁(FEMA)のような機関を設立することを提案しています。小田さんの構想の

概略はつぎのようなものです。『災害救助隊』は国内の災害だけでなく、海外で起きる災害にも直ちに対応する。難民救援機（戦闘機や爆撃機ではなく）をたくさんつくり、災害や戦争が起った地域に派遣して、必要とあれば難民を日本に迎え入れる。

その救援機には日の丸を掲げ、日の丸のイメージをかつての侵略のシンボルではないものに変える、というものです。……」（62～63ページ、詳しくは、前掲書174～175ページ）

「強者の政治」の国から 「弱者の政治」の国へ

同様に、重要な提案が「日米平和友好条約」の提唱だった。私たち、市民の意見30の会は、日米安保条約の廃棄を主張しているが、これもただ無くしてしまえ、と言っているのではない。この平和友好条約については、すでに本『ニュース』の86号（04年10月号）でのべているので、ここではくり返さない。（前掲『武力で……』にも、この条

約についての解説や条約案文が掲載されている。）
私たち市民の意見30の会は、日本を「強者の政治」の国から「弱者の政治」の国に変えようと提唱し、具体的な項目を30挙げた。それをその後の事態の変化に対応させてゆく上で、こうした小田さんの提起は非常に重要な貢献だったこと、そして、今、真剣に討議の対象としてとりあげる必要があることをあらためて強調しておきたい。

（よしかわ・ゆういち、本誌編集委員）



七五年、人生一巡、
みなさん方とともに生きたこと、
生きられたことを、
幸いに思います。
では、お互い、奇妙な言い方かもしれませんが、
生きているかぎり、お元気で。

編集後記

上の写真とメッセージは小田実さんの会葬御礼にそえられていたものです。75年の生涯、小田さんの業績への評価や評論の文章をにわかにつむぐことはできないけれどとりあえず東京でのご葬儀の様子を報告し、市民からの追悼の声をお伝えしよう、それが私たちがこの特集を作った動機でした。メールやファックスで寄せられた数多くの追悼の声の中に、小田さんが遺された『市民運動の宿題』（この言葉は吉川勇一さんの著書から拝

借しました）に対する、それぞれの答えにつながるものが確かに含まれていると思います。小田さんの追悼デモの中で、私は小田さんがつないでくれた人との出合いを大切に、ここからもう一度皆で歩き出せたらいいなあ、と考えていました。

最後になりましたが、この特集を作るに当たり、玄香実さんと、小田実告別式実行委員会、特に古藤晃さんからご協力いただいたことに、心から感謝申し上げます。

(MA)